

『韓国語教育研究』(第6号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

「ことばの民族誌」を活用した韓国語学習の設計
—短期海外語学研修(韓国)における実例を中心に—

チ ョ ン ジ ョ ン ヒ
JUNG JONGHEE

日本韓国語教育学会

2016年9月

「ことばの民族誌」を活用した韓国語学習の設計 —短期海外語学研修(韓国)における事例を中心に—

チ ョ ン ジ ョ ン ヒ
JUNG JONGHEE

우리말로는 ‘의사소통의 민족지학(ethnography of communication)’으로 알려져 있는 D. Hymes (1974)의 언어에 관한 연구 방법은 문법능력뿐만 아니라 문화와 사회에 관한 지식을 겸비함으로써 언어의 운용과 커뮤니케이션의 질을 해독할 수 있다는 1970년대 이후의 Hymes의 연구 총체를 지칭하는 말이다. 본 연구는 이러한 Hymes의 언어와 의사소통, 화자의 전달능력에 대한 이해와 응용을 바탕으로 외국어 학습자의 ‘의사소통의 민족지’ 작성을 하나의 새로운 외국어 학습 방법으로써 제안한다. 학습자에게 보다 실질적인 언어의 요소들을 스스로 관찰, 기록하여 학습할 수 있도록 하는 일련의 시도와 ‘의사소통의 민족지’ 작성의 분석을 통해 특정 상황에서 ‘의사소통의 민족지’ 학습이 어떻게 한국어, 또는 그 외 외국어 학습에 효과적일 수 있는 지를 확인한다.

1.はじめに

ことばの民族誌¹(ethnography of communication)は、「文法能力²」とは別に「文化的知識」を伴う「コミュニケーション」、「言語運用」、「スピーチ」の解読が可能であると提唱したD. Hymes(1974)独自のアプローチであり、1960年代から1970年代にかけて書かれたHymesの一連の論文の中にその基礎となる言及がある(石黒, 2010)。ことばの民族誌研究の初期において「スピーキングモデル(The SPEAKING Model)」が設けられ、「スピーチコミュニティ(speech community)」研究におけるコミュニケーションの社会文化的側面の分析が試みられたのである(Hymes, 1974)。日常生活の具体的な場面における個々のことばの使用により注目し、発話者の伝達能力を解明しようとした Hymes の一連の研究成

¹ D. Hymes 理論上のものについて述べている。外国語学習のために設計し、本研究で扱うことばの民族誌に関しては「」の中に表記し区別する。

² チョムスキーの提唱した「Linguistic competence」を指す (N, Chomsky, 1965)。

果は、後にアメリカ言語学会を中心に社会言語学胎動の始発点と評価されるようになっていった(石黒, 2010)。

本稿は Hymes によることばの民族誌研究を応用して設計された外国語学習を目的とした「ことばの民族誌」の設計と学習成果に関する考察である。「ことばの民族誌」を通してスピーチコミュニティの「発話状況(speech situation)」、「発話出来事(speech event)」、「発話行為(speech act)」を学習者が観察し、母語話者が、いつ、どのような状況で、誰に対して、どのような言語使用を行うのかを記録していく作業である。言語と文化の間にある不可分な関係に気づき、教科書からは学べない実在的なことばの欠片を学習者自身に拾わせる(Bloomfield, 1926)。学習者は初級レベルの韓国語学習者 39 名(日本人 30 名、中国人 5 名、香港出身 1 名、米国人 2 名、インドネシア人 1 名)で、4 週間の短期海外韓国語研修³(韓国ソウル市)の参加学生である。本稿では、まず「ことばの民族誌」の設計と韓国語学習への応用について述べる。また、学習者の観察記録を分析することで「ことばの民族誌」が韓国語教育、あるいはその他の外国語教育の現場において新しいメソッドとして活用される可能性について考察する。

2. Hymes のことばの民族誌研究

ことばの民族誌研究は、言語活動の諸場面に介在する文化的要素に注目し、文法能力をはるかに超えた文化的知識を背景に個々のメッセージを解釈すべきであると考えた人類学的視座から捉えたコミュニケーション研究の総称と言える(黒石, 2010)。Hymes(1974)は、談話の分析と発話者の伝達能力をはかるために「発話状況」、「発話出来事」、「発話行為」の区分けの上に「スピーチコミュニティ」が形成されていることに注目した。スピーチコミュニティの概念は Bloomfield(1926)の時代に言語学の世界へ導入されたと考えられるが、1960 年代以降、とりわけ Hymes(1974)以降においては社会言語学の分野における「言語と文化の間にある不可分な関係」を前提とした概念として理解されていった。一般には N. Chomsky(1965)批判の文脈から読み取られてきた経緯もあり、言語体系の構造に対する理解のみならず、社会文化的背景を知らなければ個々の会話

³ 立命館アジア太平洋大学(大分県)は毎年、韓国の高麗大学校韓国語センター(本校)へ学生を派遣し、短期海外語学研修(イマージョン・プログラム)を行っている。本稿では、2015 年の参加者 19 名と 2016 年の参加者 20 名を対象に学習成果の分析を行った。

の中に潜む話者の伝達能力は解明できないとHymesは考えたのである。当時代におけるHymesのことばの民族誌研究がN. Chomsky(1965)批判の題材として適切なものであったかどうかについては様々な観点があるものの、Hymes & Gumperz(1964)に始まったこのような言語を「文化的なもの」と考える一連の動きは広義として社会言語学胎動期の一潮流を成したと評価されてきた。

3. 「ことばの民族誌」の設計

Hymesのことばの民族誌研究において「発話状況」、「発話出来事」、「発話行為」における話者の伝達能力を解明するための努力があったように、外国語学習のプロセスにおいても母語話者による個々の会話を観察し、分析していくことで得られる学習効果があるのではないかという一考が「ことばの民族誌」を設計するに至った契機と言えよう。また言語と文化の間に「不可分な関係」があるのであれば、学習者は学習言語の中に潜む文化的要因に気づくことでより実在的な言語の学習と使用を実現することができる。実際の会話、談話を観察する中で、母語話者が自己の意思をどのような状況で、どのようなことばや表現を用いて伝達するのかに気づかせられる。そして、その「気づき」を「学び」へ繋げていくためのツールこそが「ことばの民族誌」である。

設計にあたった韓国語学習のための「ことばの民族誌」は、「言語領域」、「社会・文化領域」、「今日の反省と明日の計画」、「日記」の4つの領域で構成され、研修期間中の27日間における作成を課題とした。書く内容や観察対象は学習者に自由に設定させ、使用言語は「言語領域」、「社会・文化領域」、「今日の反省と明日の計画」は日本語、あるいは英語⁴で、「日記」は韓国語で作成するように指導した。学習者は母語話者による韓国語会話の一部を観察し、文字起こし、録音、メモを取るなどの方法で新しいことばの発見、既存知識の再確認を行っていった。具体的な書き方に関しては、作成例(付録1.)と別途のガイドライン(付録2.)を提示し、観察と記録による自主的な言語学習の実行を促した。各領域に記録した内容は教員や母語話者TA(Teaching Assistant)との二次学習に繋げていくように指導し、二次学習においては学習者の韓国語による発話を促しながら指導を行った。学習の振り返りと見えやすい行動計画を毎日立てるために「今日の反省

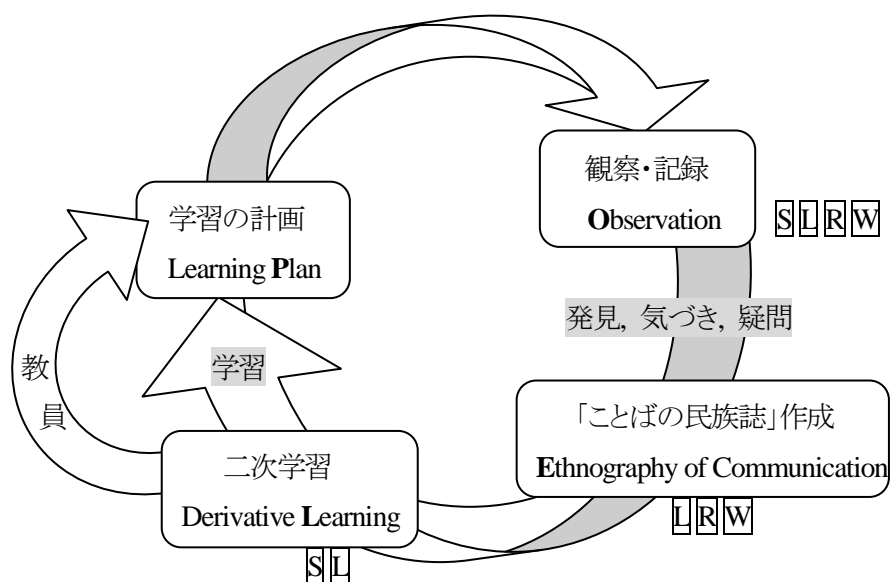
⁴ 学習者の母語と韓国語の両言語で作成することが望ましいが、添削のために日・英・韓の3カ国語の使用を指導している。教員の使用言語に従って若干の制限が生じた。

と明日の計画」、「日記」の領域を設けているが、本稿では民族誌研究を背景に設計された「言語領域」と「社会・文化領域」の両領域に注目し、「ことばの民族誌」による韓国語学習の新しいモデルを提言する。

4. 「ことばの民族誌」を活用した韓国語学習

「ことばの民族誌」の「言語領域」、「文化・社会領域」の二つの領域において学習者は観察→記録→二次学習の活動を毎日実行した。学習者は観察した言語使用を記録していく作業の中でより母語話者の言語使用に意識的に注目し、二次学習の中で「気づき」や「疑問」を「学び」へと固定化していく。そして、その日の「学び」の内容に基づいて新たな観察・記録や確認の作業を計画することが可能と考えられる。ここでは、それぞれの領域に学習者が記録したものを並べ、「ことばの民族誌」を通してどのような韓国語の学習が実現できるのかを考察する。

<図 1. 「ことばの民族誌」学習の POEL サイクル>



□S: Speaking skill, □L: Listening skill, □R: Reading skill, □W: Writing skill

4.1 「言語領域」の分析・考察

「言語領域」では、語彙に関する観察や記述が多く、新しい語彙や表現の発見、学習済み語彙の語用上の使用に関する疑問とそれに関しての二次学習が行われた。27 日間の作成において一人の学習者は最少で 81 個から最大 216 個の新しい語彙を学習したと見られる。語彙の使用に関わる観察や記述では類似語の意味上の比較や日本語との比較などが目立つ。語彙に関する観察が多かったのは、一連の作業が課題として課されたことを考えると初級学習者にとって短編的に理解しやすく、短時間で用意に結果が出せる方向へと偏った傾向があったと思われる。また会話の始終をじっくりと分析できる環境ではないことから談話テキストの全体を十分に理解することは困難な場合が多かったものであろうと考える。その他、接客場面における決まり文句⁵、慣用句⁶、擬態・擬声語、外来語に関する記述も多かった。文法機能に関するものについては既に学習済みの内容を再確認している記録が多く、聞き取ったことばや文章から未学習の文法を類推するまでには至らなかった。学習者は文法内容を先に習得し、その活用例に慣れていく学習を主に行っているため、コンテキストから言語使用の様態を類推する能力は十分に身につけていないものと考えられる。教室内授業においてもコンテキストから意味を導出していく訓練が必要となってくる。現実言語⁷の使用に関しては、とりわけ外来語の発音や表記上の問題で学習済みの知識との間で混同を起こす学習者が多かった。発音に関するものではまだ学習していない発音規則、例えば、「ㄴ添加(ㄴ첨가)」や「流音化(유음화 현상)」についての記録があった。その他、漢字の韓国語読みについての記述も多く見られた⁸。

以下は、学生 A と学生 B の作成例と中心に、「言語領域」の作成内容を「語彙使用に関わるもの」、「接客マニュアル・決まり文句」、「文法機能に関わるもの」、「慣用句」、「現実言語の使用に関わるもの」、「外来語」、「流行語・新語・卑語・俗語に関わるもの」、「擬声・擬態語」、「表記法に関わるもの」、「発音に関わるもの」、「その他」の諸項目別に分

⁵ 発話状況として「接客」、「買い物」を選んだ学習者が多かった。

⁶ 聞き取り、文字起こしに正確さが欠けていたことが特徴的であったと言える。二次学習において修正・添削が行われた。

⁷ 標準発音法(国立国語院、「標準語規定」と異なる音で広く発音されていると考えられる韓国語の単語群(金, 2004)。

⁸ 母語に関係なく全員が日本語を第二言語として学習している学習者であったことが影響していると考えられる。

類したものである。

<表 1. 「言語領域」の作成例(学生 A、学生 B)>

語彙使用に関わるもの				
아이고	무조건	영수증	음식물쓰레기	사랑
조용하다	답답하다	상냥하다	급하다	지내다
의사	-이/가 떨어지다	기능	향기	잠깐
없다	성실하다	요령	싫어하다	빌리다
우리	방수	너도 나도	불편	잔
화를 내다	망하다	다르다, 틀리다	구전(口傳)	식사하다
잘하다	창피하다	복잡하다	글썩	빌다
신사(紳士)	거스름돈	주간	그럼	냄새
챙기다	친절하다	몸값	이야기하다	운전하다
믿음직하다	연예인	잇다	보내다	진통
콩물	억울하다	애, 개, 재	물개	출가
편리하다	별써	좋아하다	운동하다	자랑하다
接客マニュアル・ 決まり文句に関するもの	文法的機能に関わるもの		慣用句	
영수증 필요하세요? 봉투 필요하세요? 현금이에요? 카드예요? 현금영수증 해 드릴까요? 진동벨로 알려 드릴게요. 또 오세요. 사랑합니다 고객님. 드시고 가세요?	-하다, -해 -기 바라다 -버니다/습니다, -해요 -을/를 주다 -어/아 버리다 -이며, -으며, -며 -ㄴ/은/는데요		가슴을 치다 가을을 타다, 봄을 타다 간덩이가 붓다 갈 데까지 갔다 감이 오다 고무신을 거꾸로 신다 귀가 어둡다 기가 막히다 마지막 카드 눈이 높다 귀다 얇다	

現実言語の使用に関わるもの の (標準語, 現実言語)	外来語	流行語・新語・卑語・ 俗語に関わるもの
케이크(케익*) 프라이드(후라이드*) 바비큐(바베큐*) 소시지(소세지*) 로션(로손*)	햄버거 콜라 샐러드 디저트 핫도그 스테이크 스킨 립스틱 매니큐어 오케이 티켓 프로, 퍼센트	대박 환경 친화적 종방 -왔/었음? 꿀잼, 노잼, 핵잼, 핵노잼 기러기아빠 딸딸이아빠 개 맛있어, 개 웃겨 길치 닭살이 돋다 간지나다
擬声・擬態語	表記法に関わるもの (標準表記法, 誤記*)	発音に関わるもの
드르렁 드르렁 줄줄 술술	케이팝(케이팝*)	갯잎 카페

その他

<漢字の韓国語読みに関するもの>

병(兵, 丙, 並), 성(聲, 性, 成), 정(政, 精, 正), 경(經, 境, 傾), 당(當, 唐, 糖), 능(能, 凌, 陵), 강(姜, 康, 剛), 종(種, 終, 縱), 향(向, 響, 香), 창(昌, 唱, 創), 양(量, 羊, 兩), 방(方, 防, 房), 승(承, 乘, 勝), 등(等, 登, 燈), 상(上, 狀, 相)

<衣類のサイズに関するもの>

44 사이즈, M 사이즈

*「標準表記法」に反するもの

4.2 「社会・文化領域」の分析・考察

「社会・文化領域」では、日常諸場面における韓国社会・文化に対する疑問を学習者自ら取り上げ、観察・調査活動を通じて「言語的発見」を学習へとつなげていくことを主な目的とした。「言語領域」と同じく、教員、または TA による二次学習を通じて社会や文化的背景に潜む韓国語をいかに発見するかが学習の狙いと言える。

以下は、学生 C が記述した「社会・文化領域」作成の一例である。

<表 2. 「社会・文化領域」の作成例1. (学生 C)>

社会・文化 領域	「 <u>シチュエーション</u> 」
	ミョンドン駅のエスカレーターに乗っているとき、皆右側に立っていた。
	「 <u>疑問</u> 」
	日本では関西地区のみ右側、その他の地域では主に左側に立つが、韓国でも地域ごとにエスカレーターに立つ位置が違うのか。
	「 <u>私の予想</u> 」
韓国では全国的に右側に立つ習慣がある。	
「 <u>友達に聞いた</u> 」	
右側に立つ人が多いが、そもそもエスカレーターを歩いて上ったり下ったりするのは危ないため、政府による「두줄서기(両側に立つ)」キャンペーンなどがあるという。韓国ではエスカレーターの片側を空けなくてもいい。	

学生 C はエスカレーターの並び方を観察し、韓国社会における文化面の要素を理解するとともに「두줄서기(エスカレーターの両側に立つこと)」を学習している。学生 C は、その他に「진동벨(振動ベル)」、「꽃다발(花束)」、「노약자(お年寄り)」、「일반쓰레기(燃えるごみ)」、「앵앵([エンエン], サイレンの音)」などの語彙を観察・記録し、二次学習を行っている。学生 C の他にも「社会・文化領域」の作成を通して「전봇대(電柱)」、「리필(リフィル)」、「현금영수증(現金領収書)」、「포켓볼(ビリヤード)」、「와이파이(ワイファイ)」などの語彙が収集されている。「現金領収書」など韓国特有の制度や習慣に関する語彙に関しては二次学習でその背景についての補足が行われた。

以下は、学生 C による「社会・文化領域」作成内容の一部を要約したものである。

<表 3. 「社会・文化領域」の作成例2. (学生 C)>

場所	シチュエーション	気づきと言語学習
ファストフード店 패스트푸드점	円形のベルを渡されて商品が出てくるまで座って待つことができる。	このベルのことを진동벨(振動ベル)というらしい。
高麗大学広場 고려대 광장	花束を売っている商人がたくさんいた。	花束は꽃다발. 韓国では入学式でも花束をあげる。
レストラン 레스토랑	割り勘文化がないと思っていたが、割り勘で勘定を済ませるグループをよく見かける。	最近は割り勘文化が定着しつつあるらしい。ただ、割り勘を意味する語はなくて뽕뽕이(日本語の「分配」に由来)とかN분의 일という人が多いらしい。
地下鉄とバス 지하철과 버스	地下鉄の優先席に若者が座らない。バスの優先席には座っている。なぜなのか。	市外バスはお年寄りがあまり乗らないので優先席が空けば座るそう。地下鉄はお年寄りがよく乗るので皆空けておく。優先席は경로우대석, 노약자 전용と書いてあった。
街中 길을 걷다가	ゴミ袋を観察してみた。	燃えるごみ 일반쓰레기 生ごみ 음식물쓰레기
大学前 대학교 앞에서	学校の前に印刷や製本を専門に行う業者が多い。	論文の編集や資料の大量コピーをする店と聞いた。인쇄소とか~사という名前がついていることが多くて、韓国ではどの大学でも見られる光景だそう。
車道 차도	バス、タクシー、乗用車のナンバープレートの色が違う。	バスやタクシー는 노란색 乗用車는 흰색 商業車는 검은색
街中 길을 걷다가	横断幕に돌잔치 전문と書いているのをみて思い出した。	돌잔치는満1歳の誕生日。お米、お金、糸、筆をおいて子供がどれに手を出すかを見て将来を占うらしい。お米とお金=金持ちになれる、糸=長生きする、筆=勉強ができる。돌잡이というらしい。

街中 길을 걷다가	救急車が通っていたが、サイレンのピーポーピーポーの音は韓国語で何と 言うのだろう。	韓国人の友達は叫び叫びと言ったが辞書にはない。サイレンの音で探したら 앵앵という擬声語があるらしい。
カラオケ 노래방	カラオケが前払いだった。	前払いは선불、後払いは후불という。

「社会・文化領域」に関する記述では、日本と韓国との比較からくる双方の類似点・相違点に対する気づきが多く見られた。また様々な場面から自由にことばを収集させていたため初級学習者の学習過程において優先的に取り入れるべき言語の使用に関する学習を誘導することはできなかった。学習者が経験したシチュエーションと収集したデータを尊重しつつ、二次学習においては学習者の学習到達度を考慮した指導の調整が必要となってくるものと考えられる。

5. 学習効果

「ことばの民族誌」を活用した4週間に渡る韓国語学習では、以下のような学習効果があったと考えられる。

5.1 新しい語彙の学習

上述したように、学習者が「ことばの民族誌」の作成を通してもっとも注目したのは新しい語彙の学習であった。対象者全員が韓国語学習歴1年未満の初級学習者であったため、文脈に関わる観察よりも短い語彙を聞き取ることが容易であったと思われる。語彙群に関しては、流行語・新語・卑語・俗語に関わるものと擬声・擬態語の記述がもっとも多かった。なお、「ことばの民族誌」作成にあたっては辞書を引いて聞き取った語彙の表記を確認していたため、二次学習で表記上の誤りは目立たなかった。

5.2 文法の学習

先述したように、今回の対象学習者39名は全員が初級学生であったため、文法機能

に関する発見はそれほど多くなかった。しかし、すでに教室で習った文法に対して再確認するほか、語用上の疑問を二次学習に連結していく学習者が見られた。パンマル(반말)に関する記述が多く、「-아(어)」, 「-지」などのパンマル語尾を聞いて「-아(어)요」, 「-지요」と比較して例文の練習をする学習者が多かった。教室授業ではまだ반말を導入していないが、ピアグループでの言語使用の機会が多い学習者集団であったことが影響していると考えられる。

5.3 二次学習と学習計画


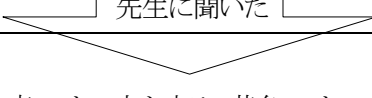
「ことばの民族誌」作成のPOELサイクルにおいて、学習者は「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」能力をバランスよく向上させるために二次学習と学習計画を行っていた。二次学習では、教員やTAに対して記録した内容を韓国語で説明し、問いかけ、韓国語による会話の中から答えを導き出す作業を毎日続けた。また、教員の指導の下で作成内容を修正するほか、記録した韓国語の語彙や文法内容を活用した例文リストを作成し、更なる学習へと補足を行った。二次学習で学んだ内容を翌日の「ことばの民族誌」の観察・記録の段階において再確認するために同じシチュエーションでの観察活動を計画する傾向も見られた。また、二次学習と学習計画は教員やTAのみならず、学習者間でも活発に行われ、学習者間のピアラーニングを実現することができた。

6. 結論

以上、「ことばの民族誌」を活用した韓国語学習の新しいモデルを提言した。「ことばの民族誌」は、学習者が学習している言語の言語世界へ溶け込む前の段階において、観察と記録を行うことで社会・文化を背景にした言語の使用を体験する、社会言語能力の向上をより実現しやすくするためのツールである。学習者は「発話状況」、「発話出来事」、「発話行為」を把握することでより実在的な言語の使用を学習することができる。「ことばの民族誌」作成による韓国語学習は POEL サイクルに沿って「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」能力の向上を促し、教員、学習者、学習者間のラーニングサークルを形成し、

持続的な学習を可能にする。本稿は 4 週間の短期海外研修における学習行為を観察・分析しているが、このような活動は母語環境でなくてもメディア・コンテンツを活用しての実現も考えられる。また、学習者のレベルや言語体系の特徴などを十分に考慮し、韓国語、その他の外国語学習においても活用が可能であるとすれば、外国語学習・教育の新たな方法論としての更なる研究が必要となってくるのではなかろうか。

<付録 1.> 「ことばの民族誌」の作成例

作成 月日	()月 ()日 ()曜日
言語 領域	<p>°シチュエーション:カフェで隣の席に座った人の会話を聞いた。</p> <p>°対象:3組、1組目:男1名、女1名(おそらく恋人同士)、2組目:女2名(友達)、 3組目:男1名、女2名(おそらく男は大学の先生、女2名は学生)</p> <p>°時間:1組目(約25分)、2組目(約30分)、3組目(約15分)</p> <p>°気になったこと:女の方はよく「진짜?」という。あいづち? 男はあまり使わない。若い女性がよく使う? 「~거든요?」はどういう意味? 「~입니다」,「~습니다」より「~어요/아요/이에요/예요」を好む。 先生に対しても「~입니다」,「~습니다」をあまり使わない。 「뭐 드실래요?」と言った。飲む=드시다는 OK?</p> <p>°私の予想:省略</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px; display: inline-block;">TA に聞いた</div>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>「진짜?」:男女ともよく使う。</p> <p>「~거든요?」:TAの説明ではよく分からない→先生に質問!</p> <p>「~어요/아요/이에요/예요」の方がフレンドリー。年上にでも使える。</p> <p>パブリックスピーチの時はちょっと不適切かも。先生と話す時は OK!</p> <p>飲み物も「드시다」で言える。</p> </div>
社会 文化 領域	<p>°シチュエーション:新村へ行こうと思ってアナム駅前でバスを待っていた。</p> <p>°疑問:バスの色が「青」と「赤」と「黄色」とあるのはなぜ?</p> <p>°私の予想:会社が違うから。</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px; display: inline-block;">先生に聞いた</div>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>バスの色は路線の種類を示す。</p> <p>赤:ソウル中心部と市外地をむすぶ/ 青:ソウル内を走る/ 黄色:ソウル内のも っと狭い範囲を走る。「마을버스」というらしい。</p> <p>ソウルと首都圏のみの制度らしい。地方はまた違う。</p> </div>

<付録 2.> 「ことばの民族誌」の作成ガイダンス

2015 年度、APU 韓国語イマージョン・プログラム

研修課題① 「ことばの民族誌」の書き方

1. 「ことばの民族誌」とは

「民族誌」とは何でしょうか。社会学や文化人類学の授業を履修したことのある学生は聞いたことがあるかも知れません。「民族誌」はある社会や文化の特性を理解するために、その社会・文化の中にいながら見たこと、聞いたこと、体験したことなどを書いていくものです。これは「質的研究」と言われるもので、「民族誌」とは研究の手段・方法として用いられる一種の「旅行記」のようなものです。

では、「ことばの民族誌」とは何でしょうか。これは一般的に定着している概念ではありませんが、ある社会の言語使用に注目し、「気になったこと」、「母語と異なると思ったこと」、「面白いと思ったこと」、「知らなかったこと」などを記録していくことによってその社会の言語使用—私たちの場合は韓国語ですね—をよりよく理解しようという試みと言えます。「言語」と「社会」、「文化」を研究する人たち—社会言語学や談話分析の領域—の間では「コミュニケーションの民族誌(Ethnography of Communication)」とも言われています。

皆さんが外国語を習得するとき、先生の説明を理解・応用し、また単語や文章を覚えたり、発音をよくするために繰り返し練習をしたりといった努力、あるいは能力が求められますね。このような言語学習に必要な最小限の「能力」を「認知的要因」と言います。でも、教室の中で一生懸命勉強したものが教室の外で通じなければ意味がないですね。「よりリアル」な言語世界は教室の中ではなく常に教室の外にあるわけです。たとえば、カフェでコーヒーを注文したり映画のチケットを買ったり、韓国人の友達と口げんかをするなんてこともあるかも知れませんが、「口げんかをするための韓国語」を教えてくれる先生はそんなにいないでしょう。すなわち、「自然的状況」、「相互作用」と呼ばれる「よりリアルな韓国語」に触れるためには韓国社会の様々な日常に入り込み、それを観察・理解する必要があります。言語学習の研究者の間ではこれを「社会的要因」と呼んだりしますが、皆さんには韓国語を習う際にこの認知的、社会的要因の両側面を意識しながら学習を進めていってほしいと思います。

2. 「ことばの民族誌」を書く前に

皆さんは韓国の高麗大学で毎日4時間の韓国語授業を受けることとなります。しかし、授業が終わったからといって「自由時間」とちょっとした「旅行気分」になってはいけません。毎日忙しくて少し辛いと思うかも知れませんが、「集中学習」に参加していることを思い出して、とにかく起きている間は「勉強」と考えてください。しかし、ずっと机に向かって単語をたくさん覚えるといった意味ではありません。カフェに行ったり、友達とご飯を食べたり、バスに乗ったり、買い物に行ったりすると思いますが、そこで皆さんは「勉強」をするのです。「カフェに行って単語を覚えるんですか？」と聞かれたらそれは違います。カフェに行ったのであれば周りをよく「観察」してみてください。現地人の韓国語を観察するのです。注文する時の店員と客のやりとり、となりに座ったカップルの会話、男の人が話す韓国語と女の人が話す韓国語、お年寄りの韓国語と子供がお母さんに使う韓国語、話す時のジェスチャー、声の大きさ、イントネーションなどなど、気になることや面白いことがあれば「ことばの民族誌」に記録しておきましょう。そして、「何であるシチュエーションで〇〇と言ったのか」、「何で韓国人の若い女性は〇〇をよく話すのか」といった具合で疑問に思うことを整理し、「〇〇だから〇〇と話す」、「韓国人は〇〇の場合は〇〇とよく言う」といったふうに自分なりの推測を書いてみるのもいいでしょう。そして、記録したものについては必ず TA や先生—高麗大学のキャンパスですれ違う学生たちに聞いて見るのもいいでしょう—に聞いて解説をしてもらってください。

あなたはカフェでよく「チンチャ？」とあいづちのような言葉をつかう若い女性が気になったとしましょう。「韓国人の若い女性は『チンチャ？』とよくあいづちを言う」と「観察」をしたわけです。そこであなたは『「チンチャ？」は年上の人にも使えるのか?』という疑問が生じたとする。これを記録し、周りの韓国人に聞いてください。もちろん、韓国語で聞かないといけなわけだから「聞き方」には予習・練習が必要ですね。そして次の日には「韓国人のよく使う『チンチャ？』というあいづちは男女とも使えるが、年上には『チンチャヨ?』と言った方がいい」といった回答がもらえる。さあ、これで「チンチャ？」と「チンチャヨ？」の使い方が分かったわけですね。それでは意識的にこれらの言葉を使ってみましょう。「観察」→「疑問」→「推測」→「理解」→「練習」の順ですね。これを毎日行ってください。

3. 「ことばの民族誌」の書き方

「書き方の例」に示したように「ことばの民族誌」作成にあたり、いくつかの必要事項を書いてありますが、基本的に書く内容、観察の方法などすべての活動形式については「自由」に行ってください。観察する対象や時間も自分なりの設定で、できれば皆さんの個性が出るような「民族誌」にしてほしいと思います。絵を描いてもいいし、写真を貼ってもいいです。また「ことばの民族誌」は「言語領域」がメインですが、言語以外のことについても書く欄があります(社会・文化領域)。これについては「書き方の例」を見れば理解してもらえものと考えます。「反省と計画」は自分自身の成長を短期間で振り返るためのものです。プログラム全体の振り返りは事後授業で行いますが、この欄を使って1日の反省と計画を立ててみてください。日記は「入門クラス」の参加者は日本語または英語で、「初級クラス」以上の参加者は韓国語で書いてもらいます。「入門クラス」の参加者も韓国語まじりの日本語・英語で書いてみてはいかがでしょうか。そこは自由に行ってください。「ことばの民族誌」は毎日書いてください。「忙しいから」、「疲れたから」と二日分を一日で書いては「効果」がないです。巡検教員にチェックをしてもらってください。完成したものはプログラム終了後、提出してもらいます。

<付録3> 「ことばの民族誌」の作成事例(学生A)

作成月日	(2) 月 (15) 日 (月) 曜日
言語領域	<p>○シチュエーション: ファストフード店でまわりに座した人の話をきいた。</p> <p>○対象: ① 女2名(아름아) ② 若い女(2名) ③ 男2, 女1</p> <p>○日時間: ① 20分 ② 25分 ③ 5分</p> <p>○友になつたこと: (1) 이 사람이? 있나? はちがうのか。 (2) 이인말 同士で話していたが途中언니と聞いた。 언니に敬語はつかわないのか; (3) 우리 오빠 를 運呼。(目では名前つかうから違和感) (4) 어디니~ と女の言った。女のことは? (5) 하고...などと 下子という。かわいから?;</p> <p>○私の予想: (1) 이 사람이 のほうが女性に"使"える可能性がある。 (2) 姉妹か、幼なじみかなと思つた。 (3) なかがよいからでも、家族や国の話でも 友りをつかうて ITなどで、自分が関係しているとつかうのだと思つた。 (4) 이 사람이 と同じで 女のことは? (5) 고 下子のほうが"敬語"しやすいから。</p> <p>(1) 意味は同じが やいよ (TAP) できたら TA と 韓国人の友人 (2) 中がよければ 언니にも 이인말 をつかう。 TA にきた (3) うちの〜と同じコンスで、仲よくなる と 友だちな比 友り〜とつかう。 (4) ~するの? と なるのよ 固の人とつかう。 手は 相手にもつかう。 (5) ソウル、うことはとも言われることもある。口語体である</p>
社会・文化領域	<p>○シチュエーション: バスに乗っていた。</p> <p>○発着間: なぜ降りる時に、T-moneyカードをタッチしないのか。</p> <p>○私の予想: 降りる時にしていたら日時間か"かかるから。</p> <p style="text-align: center;">(韓国人にきた)</p> <p>빨리빨리文化 (いそげいそげの文化) の一節で もたもたしたくないから。 もたもたしていたら バスが 発車してしまうから。</p>
今日の反省と明日の計画	<p>水がほしかったけど、店で"여기요~"というのが"取っ手"かしくて 友だちにやれ! と言われたからやった。自主的にできなかった。</p> <p>→ 明日からは、積極的に使う。簡単でもいいから使う。 授業がアタマるので、質問を 2回 は 先生 先生 先生</p>
日記	<p>오늘은 입학식이 었다. 각문과 면접이 있었으니까, 너무 긴장했다. 하지만, 수업은 들은적이 없어서, 면접은 재미있었다. 입학식과 캠퍼스 투어 후에 한국인 선배랑 밥을 먹으러 갔습니다. 삼계탕을 먹었는데 너무 맛있었다. 그 선배랑 한국어 연습도 했는데 긴장해서 잘못했다. 내일 부터 수업도 열심히 하겠습니다!</p>

<付録 4.> 「ことばの民族誌」の作成事例(学生 B)

作成月日	(2) 月 (17) 日 (木) 曜日
言語領域	<p>シチュエーション: TAY に行った。学生食堂で隣の席に座った人の会話を聞いた。</p> <p>対象: 1 組目: 男 2 名 (おそろく兄弟), 2 組目: 男 1 名, 女 1 名 (恋人) 3 組目: 男 1 名 (ドゥミ)</p> <p>時間: 1 組目 (30 分), 2 組目 (25 分), 3 組目 (1 時間)</p> <p>気になったこと: 「~마저, ~조차, ~까지도, どう違う? ⇒ (1) 마지막 촛불 }마저} 꺼져 버렸어요. (five years) (2) }조차 } (-ve) (All means: Even the last candle (3) }까지 } -. (도)... was snub out.)</p> <p>Difference: (1) eg. when people are playing game, they know it'll happen, so it not surprise. (2)/(3) (surprisingly) the electronic stop, surprisingly, the last candle also snub out.</p>
社会・文化領域	<p>Situation: I brought toothpaste (치약) randomly in the E-mart and found out the toothpaste taste salty. I was suprised by the taste.</p> <p>After asking my Korean friend, she said there are many other type of toothpaste selling, still there is quite a lot of people buying the salt taste. It's because people use salt to brush their teeth in the old times.</p>
今日の反省と明日の計画	<p>反省点: 難しい言葉はよくわからなかった。</p> <p>明日の計画: わからぬ言葉を調べた後、その日に全部覚えるようにして置く。そして、習った言葉を全部ノートに書く。</p>
日記	<p>오늘은 수업 끝난 후에 처음 도우미를 만났다. 자기 소개를 하면서 모든 퀴즈를 했다. 승리한 팀은 쿠폰을 받을 수 있었으니까 다들 열심히 대답했다. 마지막에는 가위 바위 보로 승리한 사람이 쿠폰을 받을 수 있었다. 나는 게임에서 이겼다. 정말 운이 좋았다.</p> <p>오늘 도우미와 말을 많이 하지 않았다. 그래서 우리는 다음에 만나기로 약속했다. 우리 가 더 친해질 수 있으면 좋겠다. 다음 약속이 기대된다.</p>

引用・参考文献

- Bloomfield, L. (1926). A Set of Postulates for the Science of Language. *Language* 2, No. 3:153-164.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hymes, D. & Gumperz, J. (1964). The Ethnography of Communication, Special issue of *American Anthropologist* 66, No. 6. Part II.
- Hymes, D. (1974). *Foundation in Sociolinguistics: an Ethnographic Approach*. London: Tavistock Publications Limited. (デル・ハイムズ 唐須教光 訳 (1979) ことばの民族誌 紀伊国屋書店)
- Ray, M. & Biswas, C. (2011). A study on ethnography of communication: A discourse analysis with Hymes 'speaking model'. *Journal of Education and Practice* 2, No 6:33-41.
- 石黒武人(2010)「スピーチコミュニティ: 生成される文化をとらえる媒介物」多文化関係学 7, 69-81.
- 金銑哲(2004)「표준어 규범과 현실, 표준 발음법과 언어 현실」『표준어 정책, 비판적 접근과 대안 모색』 국립국어원, 45-56.

(立命館アジア太平洋大学, 言語教育センター)
jungjh@apu.ac.jp

韓国語教育研究 第6号

ISSN 2186-2044

2016年 9月 10日 印刷

2016年 9月 15日 発行

発行 日本韓国語教育学会
〒577-8052 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付
e-mail: jaklemejiro@gmail.com

編集 韓国語教育研究編集委員会
(委員長 /金世徳 kim@ashiya-u.ac.jp)

印刷 株式会社 仙台共同印刷
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区
日の出町二丁目 4-2
TEL 022 (236) 7161 (代) / FAX 022 (236) 7163